

冷たい手のひら

第二話

# 約束は錆



西暦、ではなく――。

一九三八年。

少年がひとり、常冬の大陸を旅していた。

――一体の自動人形を連れて。

「冷たい手のひら」



海は闇を吸い込んで黒々としていた。

夜空の星の光さえ飲み込んで、底なしの闇が、波となって港に打ち寄せる。

暗闇に、一瞬、鋭く輝く光点がふたつ。

それは、少女の眼光だった。

風が強い。潮の匂いをからめた風が、男の上着をはためかせた。まだ若い男だ。剃りたての顔を、外套の襟を立てて隠している。この真夜中に、きちんと整えた髪型と、アイロンを当てたシャツを着て、ちぐはぐな印象があった。波の音しか聞こえない静寂の中、彼は少女へ囁く。

「絶対に帰って来る。いつか、必ず。だから待っていてくれ、マリン。いつか、迎えに来る」

少女は瞬きもせず、男を見上げていた。瞳に映る男の表情は焦りを示し、しかし少女を慈しむ心を忘れていない。「分かりました。ここで、ずっと、帰りを待っています。ご主人様」

「ああ。一緒に連れて行けなくてごめん。でも、絶対だ。約束だ」

男は少女の華奢な肩を抱き寄せる。抱擁を交わすと、額に小さく口付けた。

男のすぐ横の水面に船が一艘浮んでいる。彼は船に乗り込み、暗黒の海へ出立した。

静寂をエンジン音がかき乱す。

どこまでも果てなく続くような、白い軌跡が伸びる――。

船の去った痕跡が水面から消え、海が黄金に輝きだす朝を迎えても、少女はずっとそこに立っていた。立ち尽くして、一人、主の帰りを待っていた。

第一話『約束は錆』

1.

「どうだ、これ。エワルド・ワークスの一八七〇モデルだ」

海辺に一件のカフェがある。似たような建物が押し合いへし合い並ぶ通りの、舵の描かれた看板を下げた一番奥の店だ。

海風に耐える丈夫な鉄筋作りで、壁には船内を連想させる丸窓が嵌められている。内装は白で統一され、日焼けの黄ばみが目立った。店内に客数はまばらで、その全てがカウンター席に集っている。

エプロンを掛けた壮年の男が、隣に立つ少女の腕を掲げて見せた。席に連なる顔馴染みの客たちが注目する。

「すげえ」

一人が呟いた。

「だろっ？」

男が上機嫌に答える。

傍らの少女は無表情のまま、腕を男に預けていた。

男は腕をひねり、関節を優しく折り曲げ、さまざまな角度から客達に見せ付けた。

大胆な扱いながらも、手つきは少女を気遣うように丁寧だ。

「よく動くなあ」

「そうなんだよ。エワルド製は頑丈だしな」

感嘆を漏らした客が手を伸ばす。不躰に触れられても、少女は眉の一つも動かさない。

短い茶髪をロールした、肌の白い少女だった。

深い青の瞳がどこを見るときもなく虚空を捉えている。感情は何えず、冷たい印象を受ける眼差しだった。

「エワルドの過去モデルはいいな。どこで買ったんだ？」

「古物市でさ。今回、結構な掘り出し物が出ているんだ」

「本当か。行けば良かった」

「安かったぜ。こういうチャンスがあるから、市は良いよな」

男が少女の腕を解放する。視線はどこへも向かないまま、ゆつくりと、少女は腕を下ろした。やがて、ドアベルが客の来訪を報せる。

「いらつしやい」

エブロン姿の男が呼びかけた。彼はこの店の店主なのだ。

「紅茶ひとつ。ミルクで」

入るなりそう言ったのは少女とも見紛う年若い少年だった。

それこそ紅茶のような深い褐色の髪が綺麗に切り揃えられている。きつちりとした服装が育ちのよさを伺わせた。彼はドアに程近い窓際の席へ腰掛ける。

少年に続いて、背の高い女性が入店する。黒一色のワンピースを着ていた。首元までの淡い栗色の髪が、少しだけ内側に流れている。身長こそ高いが、顔立ちからするとまだ少女の年頃かもしれない、と店主は思う。

彼女は少年の選んだ席の向かいに腰を下ろした。

そうして見る横顔は血のつながりを感じさせるほどによく似ている。

「砂糖は？」

「結構」

「ミルクティーひとつ。以上でよろしいね？」

少年は頷いた。その横柄とも言える態度と、仕立ての良い外套が、生まれてこの方庶民の暮らししか知らない店主に少なからぬ反感を抱かせる。

「最近のガキは、態度がでかいねえ」

顔馴染みの客にだけ聞こえるようにぼやく。客達は追従するように苦笑を浮かべた。盗み見るように視線を向け、

「——あれもメイトかな」

「いや、どうだろう」

声を潜めて囁きあう。

少年と相席する少女へ、常連客たちが揃って目を向ける。少女は、美貌と言つて差し支えなかった。

非現実的に整った顔立ちが、彼らに共通のものを連想させる。今、このカウンター席の向こうに座っている彼女を。

「オデット。お客さんに運んで」

「かしこまりました」

先刻、腕を掲げられていた少女がトレイを受け取り、ホールへ歩む。

客達は一様に、オデットの動く姿を見守った。一步一步、床を踏みしめるように歩く。

ひどく慎重な足取りだ。つま先と踵が一度完全に地を踏んでから、次の一步一步を踏み出している。

彼女の手足は金属で出来ていた。無骨な輝きと、打ちつけられた鋳が、鎧を連想させる。

「やっぱり、良いなあ。アンティークパーツ」

「でも、中々市場に出回らないよなあ」

「そりゃあ、そうさ。俺があれを履かせるのにどれだけ苦労したと思ってるんだ。そう簡単に出回られちゃ、こっちが悲しくなる」

店主は自慢げにオデットの姿を見つめている。

人間の何十倍も時間をかけて客席に辿り着いたオデットは、ぎこちない動作で客に給仕をした。

「紅茶のお客様、お待たせしました」

「どうも」

「どうぞ、ごゆっくり、お過ごしください」

少女のみずみずしい唇から響いたのは、ひび割れたような声だった。少年が、何か気づいたように顔を上げる。

「……アリシヤ・ワークスの一九〇〇年シリーズ？ 一九〇二かな」

「おつ。分かるのか」

無意識に漏れ出たような言葉に、先刻抱いた反感も忘れて店長が応えた。

「分かるよ。マチルダ・マカロワの声だ。艶っぽくて、ちょっと低くて」

「甘えた猫みたいな声だろう」

「ノイズが酷いけど」

「これが良いんだよ。坊ちゃんにはまだ早いかな」

オーナーがオデットの頭に軽く手を触れる。

「オデット。ご挨拶して」

「かしこまりました」

バーカウンターの帰り道だった少女が踵を返し、少年に向き直る。ぎこちなく一礼し、頭を上げた。

「わたくしの名はオデット。カフェ・タイドサイドのウェイтрレスです。

御用の際は、わたくしに何なりとお申し付けください」

ほんの少し、首を傾げてみせる。

「そして俺が、このカフェの店主。マリウスだ」

「どうも」

「しかし、艶っぽいときたか」

客の一人が少年を振り返る。少年の年齢不相応な言葉選びを揶揄して笑った。

「背伸びすんなよ、坊ちゃん。名前は？　どっから来たんだ」

「――僕は、アレックス。フォルテノルドから、今社会勉強の旅をしている」

「そうか。で、ばあちゃんちはどこだ？」

「フォルテス」

「遠いな」

「じゃなきゃ、社会勉強にならないよ」

子供が親の同伴なしに旅をしていて、社会勉強と言えば、それは『親戚の家までの一人旅』という意味になる。



客もアレックスも互いに承知のことだ。

「こっち来いよ。アンティークパーツをもっと良く見せてやる」

「……見せて」

ソーサーとカップを持って、カウンター席へ移動する。

アレックスがスツールに腰掛けると、床に届かないつま先がぶらぶらと揺れた。

「フラン。おいで」

「……はい」

呼ばれて、少女が席を立つ。

「彼女は、お姉さん？」

「いや。エメス社製の自動人形だ」  
オートメイト・ドール

「やつぱり、メイトだよな。分かったかねたよ」

「今はうかつに聞けないからな。人権侵害とか言われるし」

「良いじゃねえか。なあ。メイトと見間違えるくらい美人だつてことだ」

髭面の小男、禿頭の男、長身の男が口々に言う。カウンターの向こうで、店主は無遠慮な視線をフランへ送った。

「それにしてもエメス社かよ。高級品だな。やつぱり出来が良い。何世代の？」

「基本は第三世代。顔は個人製作所の特注だよ」

「ほう。ずいぶん凝ってるな。一体誰のだ？ 坊ちゃんの趣味じゃないだろう」

「両親の。旅のお供に、大人が一人付いているように見えれば安心だつて」

「どうかな、逆に危ないんじゃないの。マリウスみたいな奴に襲われてパーツを盗まれちゃうぞ」

「聞き捨てならないな。俺の趣味のパーツは付いてない。襲わないよ」

「つてことは、趣味だったら襲うんじゃないか」

「そりや、こんな子供だ。飴と交換してもらうよ」

どつと笑いあう。

壮年の男達が楽しそうにしている端で、アレックスが不服そうに目を細めた。ミルクティーを一口含む。加糖だった。

「ちえ」

文句を言うのは面倒だった。カップを置いて、視線をオデットへ向ける。  
やはり目立つのは古めかしい部品、鉄の四肢だ。

「こいつのパーツ、何か分かるか？」

目ざとく、アレックスの注視に気づいてマリウスが問う。

「うん」

「そうさ、エワルドのオールドパーツさ！」

「回答も聞かぬうちから喋りだす。」

「自動人形文化の旗手、最古にして最大手のエワルド・ワークス。今でこそ大衆向け一般受けの会社だが、昔は違った。  
一八七〇年代、完全受注生産をしていた頃、自動人形が金持ちの贅沢品だった時代……。手曲げの鉄を組み合わせて  
作ったのが、この腕——」

「これエワルドじゃないよ」

「馬鹿言っちゃいけない！」

気持ちよく講釈を垂れていたマリウスが、判らないのも無理はない、と得意げに笑う。こんな希少で貴重なパーツを、子供なんかが見分けられるはずもないのだ。さらに詳しく説明を加えようと、オデットの腕を取る。金属性の腕をティースプーンが叩いた。

「ほら、音を聞いてよ」

アレックスが、スプーンで何度も鎧じみた腕を叩く。軽く、内側に響くような金属音が立つ。

「これ、多分、不純物がたくさん混ざってる」

「何………？」

「どうしてそんなの分かるんだ」

「音が違う。純正品と違つて、脆いと思うよ。でも見た目は本物そっくり、ほとんど変らない。もしかしたら、本物で型を取つた鑄型を使つてるのかも。作られたのも十年以内だと思うよ。古く見えるのは、劣化が早いから」

甘い紅茶で喉を湿して、一息吐く。それから、絶句している店主へ問いかけた。

「おじさん、これいくらで買ったの？」

「……………四万」

「妥当じゃないかな。だって、本物だったら安すぎでしょ」

「本当かあ？ 子供が適当言つてんじゃないのか？」

「いや……………そうだよな。証拠はあるのか？ 音なんか聞いても正直分らない」

先刻までの緩んだ表情を引き締め、マリウスが問う。

「おじさん、さっき言つてたでしょ。本物だったら手曲げ作り。贋物だったら鑄型だと思うから、つなぎ目を探せばいい。でも、すぐく見え辛くしてあると思う」

男達の目が一斉にオデットに向いた。店主はウエイトレスの腕を取り、隅々まで視線をめぐらせる。

「……………じゃあ、ご馳走様」

カップの脇に紙幣を残し、少年が席を立つ。去り行く客に目もくれず店主は鉄の腕を改めている。

「行くよ、フラン」

「……………はい」

栗毛の少女が遅れて後を追う。扉を開けると潮風が吹き込んでドアベルを揺らした。

「日が暮れる前に宿を探しに行かないと」

呟きに少女は答えない。少年は構わず、一步、踏み出した。

扉が閉まる、直前――

「あつた！」

店内に叫びが響く。

「あつた、これだ。繋ぎ目がある。クソッ……あ、待てよ坊主。おごるぜ、もう一杯飲んでけよ」

引き止める声に少年が振り返る。マリウスが閉じかけたドアを体で押し開けた。

「でも、僕、今日泊まるところを探してるんだ。もう行かなくちゃ」

「宿か。じゃあ丁度いい。うちの上に泊まつてけ。ホテルほどの快適さはないがな。今日の分の宿代は坊主の小遣いにすればいい。だろ？」

「……」

マリウスの申し出にしばし考え込む様子だったが、すぐに頷いて店内へと戻る。

「じゃあ、よろしく願います。二晩」

「いいさ。こっちはもっと話をしたいんだ。お前さんのそれ、本当に両親だけの趣味か？」

カウンターの奥へ入り、ティーポットに湯を注ぐ。先刻の席へ戻って、アレックスはカップを受け取った。

「フラン、おいで」

「……はい」

エメス社製の自動人形を呼び、隣へ座らせる。

「一体誰に仕込まれたんだよ。独学ってわけじゃないだろう」

「知り合いに技師がいるんだ。それで、ちよつと」

「技師？ どこで働いてる？」

「コッペリア」

「どこのだよ。コッペリアなんて、ひとつの町に十軒はあるだろ。——さつきはからかって悪かった、俺はコリン。

今休暇でさ。船乗りだよ」

「船乗り？」

「そう。世界中あちこちに行くけど、どこ行ってもあるよ、コッペリアは。工房から菓子屋、宿屋に服屋に美容室な」  
見ればたくましい四肢を持つ、よく日に焼けた男だった。マリウスより若く、やんちゃそうな目をしている。

「この町も、パン屋の名前がコッペリアだ」

「ややこしいっतरらないよな」

「でも、大流行したから、仕方ないよ」

少年が相槌を打つ。

「つて言っても、坊主はその大流行の時代を経験してないだろう。今いくつだ？」

「十二。今年十三」

「うへえ、若いなあ。俺の半分以下だ」

「俺の三分の一以下だな。じゃあ、丁度ブームが落ち着いた頃だ」

マリウスが皿をテーブルに載せる。スライスしたパウンドケーキが並んでいた。

「おごりだ。美味いぞ」

「いただきます。……どこで買ったの、これ？」

アレックスが示すのはオデットの手足だ。マリウスが渋面で答える。

「昨日から始まった市だ。本物だつて聞いたんだよな。ありや詐欺だろ」

「でも、何の本物、とは言つてなかったんでしょ？」

「いや。はっきり、本物のエワルドだつて——そういや、言つてなかったな。俺が手に取ったとき、一言『本物だ』つ

て呟いただけ」

「あちゃあ」

思い出して渋面を作るマリウスへ、常連達が痛みを分かつように顔をしかめてみせる。

「じゃあ、向こうを責められないね」

「そうなるのか、ちくしよう。汚い手口だ」

マリウスがオデットの腕を取る。扱いに先ほどまでの丁寧さはない。

「完全に無価値な品じゃないよ。もつとも、エワルドのオールドパーツが良いっていうおじさんみたいな人には不満かもしれないけど」

「そりゃあ、そうさ。今回はしょうがないが……はあ。次こそ本物を手に入れるさ」

どつかりと椅子に腰掛ける。深いため息を吐いて恨めしそうにオデットを見つめた。

「こいつをもつと美人にしてやりてえのになあ」

「おじさん、奥さん居ないでしょ」

「うるせえ。人の女なんかな、面倒なだけだ。俺にはこいつが居れば充分なのさ。そこまでは、人形狂<sup>フリック</sup>の坊ちゃんでも分かんたろうな。ま、社会勉強してればいつか気づくさ」

「ふーん……」

パウンドケーキを一切れ、口に放り込む。しつとりとして、けれど重過ぎない口当たり。ふんわりとやわらかな甘味が舌の上に広がる。

「……甘い」

紅茶で後味を注ぐ。悪くないが、甘いものは好きではなかった。しかし好意を無碍に出来ず残さずに食べた。

「この子はどうなんだ？ お前さんの相棒は」

「フランだ。特に貴重なパーツは使ってないよ」

「へー、詳しいのに意外だな。それで満足できるのか？」

「まあ、おこづかいも少ないからね。そういう楽しみはおとなになってから」

「良い子だ。市はまだ出てるから、明日にでも見てくればいいさ。ま、店主みたいにハズレを引かないように」

「坊主なら大丈夫だろ。むしろ、目利きとして雇いたいくらいだ」

「雇われてもいいよ」

「はは、生意気な奴。アレックスだっけ？ 覚えておこう。将来が楽しみだ」

\*

潮の香りがする。使い込まれた手すりから、色あせたカーテンから。

マリウスの家に染み付いているのは、この町の匂いだ。

「この部屋を好きに使ってくれて構わない。埃っぽいのは勘弁してくれよ」

「うん。ありがとう、おじさん」

案内された部屋は、かつての子供部屋の名残がみられる屋根裏だった。埃っぽいとは言えシートも毛布も洗いたてのものを宛がわれている。

「良い部屋だよ」

「そりやどうも。それと、マリウスでいいよ。いちいちおじさんって強調されるより、内心穏やかで居られるからな」  
「うん。マリウス。僕も、同じ理由でアレクの方が良い」

「背伸びしたい年頃か？　アレク。店を閉じるまでまだかかる。出かけるなら声をかけてくれ。夕食が出来たら呼ぶよ」  
「わかった」

窓の向こうで、海が赤く染まっている。夕暮れの日差しが部屋に射して何もかもを飴色に染める。

マリウスが去ってドアが閉まると、汽笛の音が遠くに聞こえた。

小さく吐息をひとつ。皺のないシートの上に腰を下ろす。

「フラン。荷物をここに」

「……はい、ご主人様」

侍女のように付き従う娘が滑車つきのトランクを運ぶ。

「得したな。宿代が浮く。だけど、少し居心地が悪い。……嘘をつくのは気が楽じゃないよ」

「……はい」

「おばあちゃん、なんて……顔も知らないや」

「……はい」

「明日は市を見てみようかな。メイベルに手土産でも用意したいし。今日のところは——」

不意に、甲高い汽笛が鈍く響く。アレックスは窓を見た。飴色の光を投げかけるそこへ歩み寄る。

「……」

眺める先に、港がある。今まさに船が出立し、船体に尾のような白波が連なっていく。停泊している船から荷降ろしをする船乗りの姿が見える。

「——あれ」

慌しく動く人の群れの端に、微動だにしない者がいた。小柄な体格だ。風に、長い髪がなびく。スカートの空気をはらんで膨らむ。——娘だ。

「フラン。さつきも、あそこに人が居た。同じ人？」

背を向けたままの問いに応じ、少女が窓へ目を向ける。

「——目視しました。身長一五五から一六〇。自動人形です。午後四時十八分にすれ違いました」

「メイト？　気が付かなかった。さつきからずっと立っているのか」

「わかりません。申し訳ありません」

「今のは独り言だ。フランに尋ねたわけじゃない」

「……はい」

表情を変えない少女へ、アレックスは呆れたような視線を投げかける。

「……面倒臭いよな、本当に」

嘆息交じりにつぶやいた。

「自動人形なんか、どこが良いんだ」

夕食に呼ばれて店へ降りた。ダイナーの利用客が三組、テーブル席を使用している。マリウスと顔なじみのようで親しげに言葉を交わす客ばかりだ。アレックスはカウンター席の端であぶったウインナーを挟んだバゲットにかぶりついていた。隣の席にはフランもいる。

ホールでは先刻とは異なる腕をもつオデットが危なげながらも給仕をしている。いつの間にか付け替えたらしい、



脈動すら感じるような瑞々しい指がトレーを支えている。

カウンターから彼女を見るマリウスの眼差しは父親のものにも、恋人のものにも似通っていた。また、愛玩物を見るようにも。

「あの腕は、スぺア？」

「ああ。さつき少し調べてみたんだが、レラック社の模造品は強度が極端に劣るらしいじゃないか。給仕中に熱いコーヒーを客にこぼしたら困るだろう？ 仕方ないが、以前のパーツに戻したよ」

「前のはアンティークじゃないんだ」

「まだ揃えられてないのさ。何せ、彼女の足を手に入れるのに苦労してね。ネットオークションでしつこく競り合った。二晩徹夜だったよ」

「ふーん」

付け合せのトマトを口に含む。思ったよりも酸味が強く、顔をしかめた。マリウスの視線を追ってオデットを見つめる。ぎこちなく動く足が、見れば見るほど危うい印象を受ける。

客は慣れているのかいちいち反応を示さない。やがてカウンターへと戻ってくると、マリウスはオデットの髪を撫でて、思い出したように言う。

「この髪だって、一八八〇年に人形劇団で使われていたウィッグだぜ」  
「凝るねえ」

「まあ、さすがに傷んでるけどな。けど、良く似合ってるだろう？ どうなんだ、お前もその子に少しはおしゃれをさせてやったら良い」

「うん。明日、市で何かあったら考えてみる」

「そうだそうだ。それが良い」

注文を受けて、マリウスが客席へ向かう。カウンター越しに見るオデットと、隣に座るフランを見比べた。無表情の少女。整った顔立ちが、余計に冷たさを強調する。合成皮膚の下に無骨な金属や無数の配線を隠した、電気仕掛け

の少女人形。——自動人形元年とされた一八九〇年から、半世紀。自動人形は（メイト）の呼称で親しまれ、一般家庭への普及率は都市部で四〇%を超えている。もはや金持ちの贅沢品であつた時代は過ぎた。

「……オデット」

「はい、何でしょうか、お客様」

「きみは、幸せだね」

「はい。わたくし、オデットは——」

か細い喉から、一九〇〇年初頭を象徴する歌謡界の女王マチルダ・マカロワの声がノイズ混じりに響く。

表情は固まつたまま、声だけが感情豊かに答えた。

「——マリウス様にお仕えして幸せです」

## 2.

食後の散歩に、と断つて店を出た。夜風は潮の匂いが一層濃く感じられる。ずうつと向こうの水面に船の明かりがちらついている。夜空との境目がわからない。吸い込まれそうな黒色が果てなく続いている。

「……くんぼんは」

カフェ・タイドサイドからすぐの港に、船着場の端に少女が立っている。アレックスは挨拶を投げかけ、反応を待った。夜の中、少女の姿は不確かだった。アレックスへ向けられた瞳が暗闇に赤く瞬く。メイト特有のセンサーの反応だ。暗い場所では人との区別が曖昧になるため、メイトには発光式センサーの組み込みが義務付けられている。アレックスの背後で、フランの双眸もまた赤く輝いた。

「くんぼんは。はじめまして」

「ぼくはアレックス。きみの名前は？」

「あたしの名前はマリン」

幼い少女のように甲高い声が、非現実的に響く。一昔前に大流行した音声タイプだ。

「……で何してるの？」

「あたし、待っているの」

不意に風が吹き止む。少女の真つ黒な長い髪が肩に落ち、潮を吸って黄ばんだ白いスカートが萎む。純真そうな瞳が二、三度大きく瞬いた。

「誰を待っているの？」

「ご主人様を」

「そう。早く会えるといいね。……それじゃあ、マリン。またね」

「ええ。お話してくれてありがとう、アレックス。嬉しかったわ」

媚びるような甘さではない。極めて自然体の、純朴そうな声だった。

「フラン、行くよ」

「……はい」

風景に溶けそうな黒いワンピースを翻し、フランが歩き出す。

カフェへ戻ると、店じまいの最中だった。オデットが窓のカーテンを閉めて回っている。カウンターの奥でマリウスが皿洗いの手を止めた。

「マリンを見たのか？」

「あのメイト、いつからあそこに立ってるの？」

「二年だよ。ザーっとだ」

「二年も吹きさらしで、よく今まで壊れなかったね。撤去しないの？」

「勝手に撤去して、後で文句言われると痛いからな。誰も手を出さない。俺も、莫大な賠償金を請求されたくないからな。居心地は悪いが、見てみぬふりだよ」

「賢明な判断だと思うよ」

「ははっ、賢明な判断、か。一介のメイトフリークとしては、居た堪れないんだがな……。持ち主が現れてくれることを祈るよ。……こんな時間だ、坊主はシャワー浴びて歯を磨いて早く寝ないと、すぐ朝になっちまうぞ」

「うん。シャワー借りるよ」

「タオルはそのへんにかけてあるのを適当に使ってくれ。ま、気兼ねすんなよ。自分の家だと思ってくつろいでくれ」  
「うん。ありがとう」

住居に繋がる奥のドアを抜けて、階段を上がっていくと屋根裏部屋に出る。天井の低い部屋で荷解きをして、パジャマ代わりの肌着を探り当てる。ひとつ嘆息をこぼして、アレックスはつぶやいた。

「自分の家……だつて」

嘲るように笑う。

その夜はよく眠れた。夢も見ずに。硬いベッドは深くしみこんだ潮の香りがする。洗剤の匂いの残るシーツは快適だった。アレックスは翌朝、早くに目を覚ます。

「……あれ」

いつもなら、午前七時にフランが起こしてくれる。しかしそれより随分早く目が覚めた。外がうるさいのだ。汽笛、男達の号令や、何か騒がしい声がある。時計を確認すると午前五時、朝日は少しずつ昇っている。

窓から港を見下ろすと、一面を人だかりが埋め尽くしていた。シートが一面に敷かれ、そこかしこで木箱が積み上げられている。魚の買い付けに訪れたバイヤーたちが我先にと交渉を始めている。

「そつか……漁港か」

漁港ロブラ。アレックスが訪れたのは潮の匂いに満ち、海に面した、海産物の豊富な町だ。

アレックスの故郷は海も山も遠かった。だから、こんなに活気に満ちた朝ははじめての経験だ。

知らず、長い間、外を眺めていた。慌しく人が行きかう。

朝日がまぶしく輝く中、眠気の覚めるような声があちこちで上がる。

「……マリン」

動き回る人々の中、微動だにしない彼女の姿は目に付いた。風にスカートをはためかせ、黒い髪を遊ばせ、じつと海の方こうを見つめている。人々も慣れた光景なのか、彼女を気に留るような素振りはない。

「……捨てられたんだ、彼女は」

捨てるための手続きを面倒がり、不法投棄する者は時折居る。珍しい話ではない。捨てられたメイトの回収をためらうのも、昨晚マリウスが言っていた通りの理由から多くみられる反応だ。結果、マリンのように長い間放置されることになる。——本人の意思はともかくとして。

「フラン。着替えを」

「……はい」

「マリンに会いに行こう」

「はい」

\*

着替えを終えて港へ降りると、先刻が活気の盛りであつたようで、人の姿が減つていた。船が沖へと発つていく。排煙が海風に流されていく。

「おはよう、マリン」

「……」

マリンの首が傾いて、アレックスを認識した。姿勢は海を向いたまま、アレックスがそばにやってくると正面向き直る。船が遠ざかっていく水面をアレックスも見つめた。

「おはよう、アレックス。また会えて、嬉しい」

「マリウスを知ってる？ 僕、今、彼の家に泊めてもらつてるんだ」

「そう。マリウス、知っているわ。とても親切な方」

「うん。そうなんだよ。僕も昨日知り合ったばかり。……きみ、今日もご主人様を待っているの？」

「はい。あたしは、ご主人様を待っています」

「二年間、ずっと？」

「はい。正確には、二年ではありません。二年と二ヶ月と三日、二十時間と三十七分……三十八分」

「……そう。ご主人様は、別れ際に、なんて言っていたの？」

「絶対に帰って来る。いつか、必ず。だから待っていてくれ、マリン。いつか、迎えに来る。絶対だ。約束だ、と――

そう仰いました」

「そう……」

嘘だろう。直感的に確信する。しかし、嘘をつかずとも、捨て置いて行けばいいものを。たかが無機物相手なのに、嘘をつかずにはいられなかった。マリンの主人は案外、人が良かったのかもしれない。

「――いや、ただの小心者か」

「すみません、何の話でしょうか」

「ううん、独り言。……ご主人様、帰って来ると思う？」

「はい。ご主人様は絶対と言いました。あたしと約束を交わしました」

「……いつか、っていつだと思う？」

「推測はできません。ですが、必ず、ご主人様はあたしを迎えに来ます」

「来るはずないよ。きみのご主人様は嘘をついて君を誤魔化したんだ」

「ごめんなさい、アレックス。あなたのお話を信じることはできません。あたしは、ご主人様に従います。約束が果たされるまで、ここで待っています」

「……そうか。そうだね。それじゃあ、またね、マリン」

「さようなら、アレックス。お話してくれてありがとう、嬉しかったわ」

喜びに満ちた声が囁く。その感情の本意は感じられなかった。

また風が吹いて、少女の黄ばんだスカートを揺らす。かつては純白だったのだろう繊維が、潮風によって傷み、変色している。時の経過を刻むように。それでも少女の意志は変らない。変ることなどないのだろう。

それが人に従属するように作られた自動人形のあり方なのだから。

「アレク、おはよう。散歩か？」

肌着姿のマリウスが店の前で体操をしている。

「おはよう、マリウス。無断でごめん、まだ寝てたから」

「こどもは早起き、うん。良い事だ。ま、近所なら構わんよ。朝飯までまだかかる、ちょっと待ってな。それとも、一緒に体操するか？」

「ううん、遠慮しておく。部屋に戻るよ」

店を横切って屋根裏へ向かう。店内では、オデットが窓のカーテンを開けて回っていた。

部屋に戻って荷の点検をする。携帯端末からメールとニュースのチェックを済ませる。

それからベッドにフランを座らせて、コットンタオルを手に取った。洗淨剤を含ませたタオルをそっとフランの頬に押し当てる。潮風の吹く街では、自動人形も汚れやすい。大気中の汚れを蓄積させると皮膚に沈着するため、少なくとも週に一度は露出部の肌を洗う必要がある。丸洗いは不可能ではないが、好ましくない。

「目を閉じて」

「……はい」

瞼の上をタオルが触れる。フランの露出部は顔と手のみである。肌の洗淨後、ウィングを櫛でとかしていく。

まだ背の低い少年はベッドの上に膝立ちになって、自動人形の頭頂部から毛先へ櫛を滑らせる。

「……フラン。君は——僕が絶対に迎えに来るからと言って君を置き去りにしたら、どうするの？　ずっと、待つのか？」

「はい。待ちます」

「……なぜ？」

「ご主人様との所有契約が解除されないままでしたら、私の所有権はアレックス・スノウリングにあり、他者に譲渡することはできません。ご主人様と行動を共にしないのであっても、譲渡契約または賃貸契約が行われていない場合」  
「わかった、もういい。いいよ。命令だから、待ち続けるんだろう」

「はい」

「君はいつもそれだな。命令……。命令で、二年も、海風に晒されているんだな、彼女は」

「……」

「それで、いいのか？ メイトは、それで……」

「はい。自動人形はご主人様に必要とされることが存在意義となります。命令を下されて、それを実施しているマリンは、有意義です」

「有意義、か……。ふん」

鼻を鳴らす。まるで嘲笑のように。その仕草へ、フランは何も応えない。

不意に扉が叩かれた。返事を待たずにドアが開く。

「朝食の準備ができたぜ……つと、メンテ中か。そうしていると、姉弟みたいだな。よく似てる」  
「似てないよ。……食べに行く」

ぞんざいに櫛を放ってベッドを降りる。

「おいで、フラン」

「……はい」

廊下で待つていたマリウスと並んで歩き出す。

「似てるって。顔、特注なんだろう？ わざとじゃないのか」

「知らない。作ったのは僕じゃない」

「そうか。まあ、メイトは主人に似るって言うしな」



「本当？ 聞いたことないよ。ペットならともかく」

「似たようなものさ」

マリウスが笑う。開店前の誰も居ない店内で二人、食事を摂った。メニューは昨日と同じ、バゲットにウインナーのサンド。トマトとレタスのつけ合わせに加えマッシュポテトが添えられている。

温かいミルクティーをもらい、硬いバゲットを咀嚼する。

「お前、今日はどうするんだ？ もし用事がないなら、おつかいしないか？ 宿賃のかわりと思ってさ」

「うん、いいよ。僕、明日出る列車を待ってるんだ。それに乗れば問題ないから」

「ありがたい。明日……てことは、長距離列車か？ フォルテスへ行くんだもんな、遠いよな」

「で、何すればいいの？」

「昨日コリンが話してただろ、コップペリアってパン屋があるんだ。そこでパンを受け取ってきてほしい。料金は前払いで済ませてるから、受け取るだけだ。パンさえ無事なら寄り道しても構わん。パン屋は昼前に開く。日暮れには閉まるから、それまでに頼む」

「うん。わかった」

「地図はどうする。書き起こすか」

「フランに入れてく」

「わかった。オデット」

「はい、ご主人様」

テーブルを拭いて回っていたオデットがカウンター席へ歩む。静かな店内でいい、きいと鉄の関節が鳴った。

「ベーカリー・コップペリアの地図を、フランに転送して」

「はい。登録番号十七、ベーカリー・コップペリアですね」

「フラン。オデットから地図を受け取って」

「……はい」

フランがオデットへ向き直る。二体が並ぶとフランのほうが身長が高い。二体は視線を交し合うことでお互いを認識しあい、データの送受信を行う。その間は無言である。

「ベーカーリー・コッペリアの地図、受け取りました。登録しますか」

「登録」

「登録番号三十三に登録しました」

「ありがとう」

ものの数秒で地図情報の受け取りが終わる。オデットは拭き掃除へと戻っていく。

「確かに、一人旅に連れて行くには便利だな」

「まあね」

「でも、社会勉強としての効果は疑問だが」

「同感。……ごちそうさま。市って何時から開いているの？」

「さあ、出店する人によってまちまちだからな。今からでも、開いているところは開いているんじゃないか？」

「そう。じゃあ、僕、出かけてくる」

「おお、気をつけて」

「行くよ、フラン」

立ち上がって、コートを羽織る。振り向きもせず呼びかけると、背後で少女の声が答えた。

「……はい」

\*

石畳を歩いていく。魚が売り捌かれている通りを抜けて市街地へ。日は完全に昇りきって雲ひとつない快晴が気持ちよく広がっている。心なしか人々の足取りも軽い。よく日に焼けて、よく太って、よく笑う。そんな住民の姿が多いように、アレックスには感じられた。明るい町だ。それだけに、港に立ち尽くす少女の姿が気に掛かる。

「……市って、これか」

商店街の手前にそれは広がっていた。

地面の上に布を敷き、そこへ思い思いの品が並べられている。

貝でできたアクセサリーや、日用雑貨、陶器の二流品——自動人形のジャンクパーツを並べた露店も多い。小さなものを大量に並べる店、ただの一点高価な品を置く店、とりとめなく品物を並べる店。

自動人形の部品を売る者は、並べて街外の人間だと分かる。流れの部品屋だ。

「……」

露店を流し見して通り過ぎる。アレックスの連れが自動人形だと感付いて、露店の店主が声を張り上げる。

「寄ってつてよ坊ちゃん。お小遣いでも買える部品あるよ」

「カスタマイズしなきゃかつこ悪いよ。せつかくのメイトがもつたいない」

「とつておきだよ、見においで」

声に見向きもせずに歩む。頑なな態度に、店主達は趣向を変えた。

「お嬢ちゃん。自動人形のお嬢ちゃん。ご主人様におねだりしなよ」

「たまにはおしやれさせてもらっても良いよ、ご褒美にさ」

——フランは〈エモーションナルドールこ人形〉じゃないよ。

反論を内心のみでとどめ、足早に通り過ぎる。つれない客を早々に諦め、店主達は次の標的に集中している。

「パパっ、あたし、これがいい」

「おっ。お目が高いよ、お嬢ちゃん」

賑わう声に振り返る。子供の姿をしたメイトが、父親の役割を模した男の服の裾を掴む。感情表現機能を搭載した自動人形の豊かな表情は一見ただけでは人間と何ら区別がつかない。アレックスは、連れの横顔を見上げる。何の感情も示さない冷たい横顔は、主人の眼差しに気づいて視線を合わせてくる。用件を問いかけてくるように。

「……なんでもないよ。何も用はない」

「……はい」

背後で、男が幼い少女人形へ何かの部品を買い与えていた。〈感情表現が豊かな人形〉は見慣れぬものは何にでも興味を示し、自我を育て、人に尽くす。全ての自動人形も同じように機能するが、それに伴う感情表現が著しく発達している。

「新聞取りの犬みたいな感覚でいるくせに——父親なんて呼ばせるなよな」

アレックスはまた、連れを見上げる。その無感情な横顔に安堵するように、吐息を漏らした。

ベーカリー・コッペリアは商店街の中ほど、食料品を扱う店の集合地帯にひっそりと溶け込んでいた。大きなリボンをかたどった看板が目印だ。

「いらつしやい。見ない顔だね」

パン屋らしく腕のたくましい女性が大きなトレーを掲げている。焼きたてのパンを棚に並べ、エプロンで手を拭きながらアレックスを眺める。

「どんなパンが好き？ サンド？ パイ？ ああ、惣菜も置いてるよ」

アレックスの脚で五歩も歩けば壁に当たるような小ぢんまりした店内に、所狭しとパンや惣菜が並べられている。保冷库の中にはフルーツの乗ったケーキまで収まっていた。店は狭いが手広く展開しているらしい。

「……それも良いけど、僕、お使いで来たんだ。マリウスの——カフェ・タイドサイドの」

「あら、マリウスの！ お使い？ どうして、君が？ マリウスの親戚？ 似てないわねー、でもよく見たら似てる……いや、やつぱり似てないわね。お上品な顔だもの」

中腰になってアレックスの鼻先に顔を近づける。

そうすると、女の顔のしわやそばかすがよく見えた。皮膚はあちこちに染みが浮かび、毛穴からは脂質が滲み、額に汗が浮かんでいる。健康的で、一般的で、快活な女性らしい肌をしている。親切そうな肌だった。

「赤の他人です。泊めてもらっているんです」

「宿泊客？　いつからホテルも兼業してるのよ。初耳だわ。っと、お使いね。じゃあこのパン、届けて頂戴ね」

「はい。……フラン、受け取って」

「……はい」

細い腕が女性から紙袋を受け取る。

「料金はもうもらっているから。っと……こちらはお姉さん？」

「いえ、僕のメイトです」

「あら！　失礼。もう、嫌になっちゃうのよね。一目で何か、区別できる目印が欲しいわ」

「ちよつと見れば分かりますよ。メイトは無駄な動きをしないから」

「忙しくつてね、よく見る暇もないのよ。君みたいな若い人ほど、メイトの見分けが自然とつくつてね、TVでやってたわ。ふふ、マリウスもお人形遊びが大好きなのよね、いい歳して」

「うん。相当だね、あの人」

「あはは、相当か。この街じゃ一番かも。そのせいでいつまでも結婚しないんだから。あ、これは彼には内緒、ね！　じゃ、マリウスによろしくね。あと、これ、持っていきなさい」

店を去り際、袋を放られる。

「ありがとうございます」

上手く受け取って、会釈をして街道へ出た。また町の喧騒へ歩んでいく。

受け取った袋には、パンを揚げて砂糖とシナモンをまぶした菓子が入っていた。

「フラン。これも、そっちに入れて」

「……はい」

フランが腰を屈める。手が届くようになった紙袋へ菓子袋を入れる。

「……」

少女の顔を見つめる。肌はさらりと乾燥していて、染み一つなく、毛穴は形式だけ模されている。

人口の皮膚——汗も脂も浮かばない偽物の肌だ。

そっと触れる。しっとりとした質感が指に伝わる。ほんのりと温かい。ふ、っと呼気が手のひらに当たる。

「……………」

呼吸さえ、する。

アレックスは反射的に引つ込めた手を下ろし、フランへ背を向ける。

「帰るよ」

「……………」

従順な自動人形は、ただ主の後をついて歩く。

\*

カフェ・タイドサイドへ戻ると、ランチの利用客で店内満員、店の外にまで並びが出ている状況だった。

店内を覗くとマリウスが慌しく動き回っている。こう客が多いと、オデットの動作では遅すぎるのか、少女人形は店の奥の椅子に姿勢良く座っていた。もう一人、手伝いの店員もせわしくテーブルを行き来している。

「……邪魔しちゃ悪いな」

パンを届けるのはいつでも構わないと言っていた。大至急必要な品ではないのだろう。

アレックスは踵を返して、町へと戻ろうと歩を進める。

途中で、足を止めた。

視界に入った人影に振り返る。

海を望んだまま少しも動かない影。髪や服の裾だけが自由気ままに風に揺れている。捨てられた自動人形、主を待ち続けるマリンが、今朝と変らぬ様子でそこに居た。

「……………」

「アレックス。こんにちは」

「お昼ご飯、一緒に食べる？」

「ありがたい、気持ち嬉しいわ。だけど、あたし自動人形なの。わかっていてでしょう、あなたは。どうぞ、一人で食べて」

「そう。じゃあ、お構いなく」

その場に座り込んで、フランを呼び寄せる。フランにも座らせて、紙袋を手繰り寄せた。袋の中から菓子をとり出して、口に含む——かりつ、と軽い音。ざりざりとした砂糖とシナモンの感触。甘い。甘くて、何か飲み物が欲しくなる。けれど、さくさくと軽妙な口当たりが次から次へと菓子を口へ運ばせる。

「ん……む」

思っていたより美味しかった。甘いものは好きではなかったが、しばし夢中になつてしまふ。

「マリンも、座れば」

「いいえ。あたしは、ご主人様を待っているのです」

「でも、立つても、座つても、待っていることには変わらないでしょ」

「ご主人様と別れたあの日、あたしはここで立つていました。ご主人様が再びここを訪れて、あたしが立つていなければ、ご主人様は気づかないかもしれません。だから、あたしはここで立つていなければなりません」

「それくらいのことでは、見過ごすわけがないだろう」

答えはない。ただ眼差しがじつと、水面を見つめている。波間に何かを探す姿にも見える。

「待つのを止めないの？」

「はい。ご主人様は、ここで待つように言いました。だから、あたしはここでご主人様を待ちます」

「でも、もう二年も来なかっただろう。もう来ないよ。自由にすればいいじゃないか」

さくつ。歯ごたえを楽しむ。マリンの答えはない。嘆息をひとつ、吐き出した。

「自由って、何ですか？」

立ち上がったアレックスに、声が投げかけられる。

「定義が曖昧すぎて、あたしには理解できません」

表情も声も、一段と冷たい印象を受けた。

人工皮膚のその下に金属が詰まっているのだと、知識ではなく直感が見通した。

彼女は人ではない。人のように会話をこなす、自動人形だ。

「……ごめんね、マリン。きみは、ご主人様を待っているだけなのに。……迎えに来てもらえればいいね」

迎えになんて来るわけないだろう。マリンはここで、壊れて朽ちるまで待ちぼうけを食らうだけだ——内心とは裏腹な言葉を、皮肉たつぷりに投げかける。けれど彼女は言葉を額面どおりに受け取って微笑むのだ。

「ありがとう、アレックス。もし彼を見かけたら、教えてあげて欲しいの。あたしはずっと待っているって。だから、迎えに来て欲しいって。ずっとずっと、待っているから」

「うん……もし、マリンのご主人様に会ったら、伝えるよ」

「お願いね、あたしはここを離れられないから」

「わかった。じゃあ、もう行くよ」

「さようなら、アレックス。お話してくれてありがとう、嬉しかったわ」

少女は微笑む。迎えの来ない海へと笑う。

客入りの落ち着いたカフェへ入店する。オデットも業務を再開し、代わりに店員の姿が消えていた。

アレックスに気がついてマリウスが手を掲げる。

「すまねえ、アレク。店に入り辛かったんだろう。腹減ったか？」

「……少し」

「ありあわせでよければ作るぜ。まあ、座れよ」

お馴染みになったカウンター席へ腰掛ける。

「お、コッペリアに行ってくれたか。仕事が速いんだな。感心感心」



「うん。親戚かって聞かれた」

「ははっ、マッジの奴、俺の顔を覚えてないんじゃないかねえか。で、市は見たか？」

「見たけど、微妙」

「微妙かー、厳しいなあ。昨日の店の奴はまだ居んのかな、悔しいよなあ」

「さっき見たときは、居ない感じだったよ」

「そっか、じゃあもう別の街へ行ったか。逃げられちゃったな」

「返品したかった？」

「いいや、授業料だと思っておくさ。——つと、ほれ、お待ち」

「ありがと」

大きく切った野菜やソーセージがまるごと浮かんだスープを受け取る。客が訪れて、マリウスが仕事用の顔へと戻る。店内を見渡すと、男が少女型の自動人形と食事をしていた。アレックスも、スプーンを差し出して問いかける。

「……食べる？」

「食物の摂取には専用機器が必要になります。私には搭載されていません。イーディング・マウス〈食事口〉の通信販売サイトへ接続しますか？」

「ううん。いいよ。からかっただけ」

「……はい」

「君に食費なんか、かけたくないな。ただでさえ維持費が高いのに」

「感謝します、ご主人様」

「いいよ、そんなつもりで言ったんじゃない。これ以上返事をしないで」

「……」

何を苛立っているのだろう。せつかくのスープも無味乾燥に感じる。八つ当たりなどして、本当に子供そのものだ。アレックスは自己の行動を省みる。目線を上げると、フランはいつも通りの無表情だ。

気分を害することもない、心が傷つくこともない——そもそも、心の存在を信じて良いのかさえ、分からない、機械仕掛けの存在、それが自動人形である。

淡々とスープを飲み下していく。背後でドアベルが鳴り響く。マリウスが親しげに客を迎え入れて、昨日の顔ぶれが来たのだと分かった。水夫のコリンと、もう一人。

「コリンとウイルだ。昨日会っただろ？」

「うん。水夫さんと、ウイルは？」

「魚を捌いてるよ。魚屋さんだ」

「じゃあ、今朝も港に居たの？」

「そう。明日も早いぜ」

「で、昼間から飲みに来たのか」

マリウスがからかう。二人ともカウンター席に座って、思い思いに注文をした。

「どうだ、街は見たか？」

「うん。ちよつとだけ。コッペリアに行ったよ」

「あそこのクロワッサンが美味いんだよ。食べたか？」

「うん。じゃあ、電車に乗る前買ってみる」

「いつまでロブラに居るんだ？」

「明日の電車で発つから。それまで」

「そつか。……つと」

マリウスからグラスを受け取り、三人が杯を交わす。

「乾杯」

樂しげに言葉を交わす。主に自動人形のパーツの何が良いだの、誰が組み立てた自動人形は素晴らしいだの、いかにも自動人形愛好家らしい。

「二人もメイトのオーナーなの？」

「俺はまだカタログオーナーだけだな」

コリンがぼやく。カタログでパーツを見て、それを頭の中で組み合わせているだけで、まだ実物は購入できていないのだろう。庶民にも広まったとはいえ、安くは無い買い物だ。

「俺は家から出さないんだ。何があるか分からないご時勢だからな」

「ウィルのメイトは、どんなの？」

「俺もエメス社製のフレームだ。手足は少し変えてるが」

携帯端末を開いて、画像フォルダを呼び出す。画面に映し出されたのは異国風の少女人形だった。血色よく頬がふくらんで、果実のような唇が薄く開かれている。真っ黒でねじれない髪が流れるように伸びている。

「幼いね」

「変態趣味だ、逃げるアレックス」

「ちょ、ちよつと待てよ。小さければ何でもいいわけじゃないんだぜ」

「でも小さいほうが良いんだろ」

コリンが揶揄の声をはさむ。ウィルは反論するだけ徒労と悟ったのかもはや言い返さない。

「ちえ、なんだよ。ただ綺麗なもの綺麗で、それでいいじゃないか」

「……大事にしているんだね」

「そりゃな、当然だ」

アレックスの呟きに答え、端末を閉じる。グラスに口をつけて中身を飲み干す。息を大げさに吐いて、

「つはあり、お代わり」

「あいよ。オデット」

「はい、お持ちします」

じれったいほどの時間をかけてオデットが代わりの酒をグラスに注ぐ。小麦色の液体が満ちていく。

「アレックスはどうなんだ、え？ 人形愛好家じゃないとは言わせないぞ、これ」

「僕の趣味じゃないってば。親の」

「名前は、フランだっけ？ フラン、もしもし？」

「……」

フランは答えない。その様子にウイルが首をかしげた。

「愛想ないなあ」

「……」

返事をするなど言つてあるのを思い出す。理不尽に当たつた行動を。そうさせた原因を――。

「ねえ、ウイルたちはマリンを知ってるの？」

「マリン？ ああ……」

「あそこにずーっと立っているメイトだろ？ 可哀想だよな」

「この街の奴は大抵知ってるよ。マリンと熱心に話をした奴もいるし」

「持ち主は、誰か、わからないの？」

「なんでも、調べた奴によると、ご主人は駆け落ちして町を出たんだってよ。船で。だからあの子はずっと、海を見  
てるんだ」

「駆け落ちの道行きに邪魔だし、恋人との生活に女の子の人形なんか要らないだろ」

「それで、ああやって置いて行かれたのさ。自動人形が恋人の代用品でしかなかったんだな、そいつには……」

言葉の余韻をかき消すように、グラスを置く音が響いた。

静まり返つた場を盛り返そうと、話題を探すように目配せしあう男達の端で、アレックスが立ち上がる。

「ど、どうした」

「僕……クロワッサン買いに行ってくる」

「そうか。コッペリアのは、美味いんだ、本当に。自信を持ってお勧めするよ」

「うん。じゃあ、また後で」

「おお、気をつけろよ」

「うん。……フラン、おいで」

返事はない。けれど、フランはアレックスの後を追った。

「……もう、いいよ。返事しても」

「……はい」

日が傾き始めている。潮風も冷たくコートの裾を揺らす。

視界の端で、やはり少女が立っていた。海を望んで、立ち尽くしていた。アレックスは町へ歩む。

3.

市は大規模なものになっていた。この時間帯は呼び込みの必要もないほど客が多い。人ごみを抜けて、商店街を進む。行き交う人の姿のうち何割が自動人形なのか、通り過ぎただけでは分からなかった。

商店街を行くと、まばらな人だかりのできた空間があった。大道芸人が何かが芸を披露しているらしい。

子供の姿が多く、それに付き添う大人の姿がぼつぼつ見受けられた。路地にさしかかった街角で、朝は見かけなかった小さな舞台が広がっている。

インテルメディオ・ギニョル  
【人形歌劇団〈幕間座〉】

木製の看板に色あせたペンキでそう記されている。

瘦身瘦躯の男が、体の細さからは予想外に張りのある声で口上を述べていた。

顔の半分から上を仮面で覆って、露出した口元にはにやにや笑いが張り付いている。

「お嬢様方に坊ちゃん方！ ー」笑覧あれ！

わたくし、人形歌劇団〈幕間座〉の座長、セリウス・イワーノフと申します！」

大仰にお辞儀をすると、かぶっていた帽子が落ちる。そこで、小さな子供達の間から笑いが起こった。

帽子を拾い上げるのは、男の膝ほどまでの身長しかない少女だった。

歳幼い少女ではない。ミニチュアサイズの自動人形だ。

「落ちたわよ、座長さま」

「これはこれは、ありがとう。こちらは我が劇団が誇るプリマ、ご紹介しましょう」

「キャンディ・ポップよ。よろしくね」

舞台の上へ抱き上げられ、キャンディがスカートの端と端をつまんで、膝を折る。

優雅な一礼を披露すると、イワーノフに抱き上げられた。

「本日上演致しますは、人と人形の滑稽な恋物語、人形と人の切ない愛の悲話でございます。

ああ、時計の針は止まらない。時計の針は進まない。真実の愛のはずがなぜ、こんなにもわたしを苦しめる——」

幕が上がる。小さな舞台の上に二体の操り人形が現れる。

舞台箱の上で、イワーノフが起用に片手でそれぞれの人形を操っている。

糸に吊られた操り人形は舞台でダンスを踊るように近づいては離れ、くるくると回る。

『きみはなんと美しい、きみこそ我が真実の愛。この恋心をささげよう、物静かなお嬢さん』

『喜びが空っぽの胸を焼く。嘘みたいに幸せなあなたの言葉。だけどそれは叶わぬ夢。』

あたしは人形、滑稽な木偶人形。あなたの愛はあたしには身に余るの』

『いいえ、いいえ、お嬢さん。きみ以外に誰がいる。わたしにはきみしかもう見えないのだ』

舞台の下でキャンディが手回しオルガンを演奏して、ひび割れた懐古的なメロディーを響かせる。人形の滑稽な動きに子供達はときに笑い、ときに驚き、ときに見入った。歌に乗せて物語は続く。人と人形の恋物語。周囲の反対を押し切り結婚した二人、幸せに続いた生活も、やがて破滅を迎える。

「時計の針は止まらない。時計の針は進まない。最愛のはずのきみがなぜ、こんなにもわたしを苦しめる——」

男の人形はいつしか年老いた老翁のものへ変わっている。少女の人形は変わらず幼いままだ。

『きみの時計、動かぬ針、わたしは古い、きみは永遠。』

わが時計、進み行く針、わたしは古い、きみは——嗚呼！

きみは恋したあの日のまま、なにひとつ代わりはしないのだ。

わたしはきみを置いて行く。わたしはひとり老いて行く。

恋した日々は幸せだった。愛した過去は満たされていた。それなのに何故――

問いかける声に、答えはなく。愛しい唇は、いまでも瑞々しく閉ざされている』

『微笑みだけ、永遠のように、あの日のまま変わらない。』

胸に響く針の音。止まらない、止まらない。寂しく響く、針の音』

『わたしはずっと――そう、独りだったのだ』

老翁の人形がはさみを持ち、少女人形の操り糸を切り落とす。少女人形は動きを止め、老翁は天を仰ぐ。

「時計の針は止まらない――時計の針は、進まない」

歌声は止み、幕が閉じる。キャンディの演奏も止んだ。まばらな拍手に、座長が大仰に礼をした。

「人の形は、人の鏡。まあ大概、恋心なんて、自分自身に向けられるものです。」

恋しているようで、相手は不在――良くあること、心当たりのあることでしょう」

「延々、自分の尾に噛み付こうと、ぐるぐるぐるぐる、間抜けに踊るだけなんて、滑稽ね。可哀想」

「そんな男の恋愛悲劇、恋愛喜劇、お楽しみいただけましたかな？　では、お嬢様方、お坊ちゃん方、またいつかお目にかかるまで、しばしの幕引きとさせていただきますましょう！」

キャンディが集金箱を抱えて客席を歩く。アレックスの足元にもやってきて、箱を傾けて見せた。安い紙幣を一枚、箱へ入れる。キャンディは礼をして、次の客のもとへ歩む。

「……行こう、フラン」

「……はい」

いつの間にか足を止めて、公演を見入っていた。時間の無駄だった、と己を省みて、アレックスはベーカリーへ向かう。

\*

ベーカリー・コッペリアも混んでいた。

とは言え、数人の客でいっぱいになってしまふような店内だ。客が去るのを待つて入店する。

「いらつしやい。……あれ、マリウスのところの」

「アレックスです。こんにちは」

「どうしたの？ 不備あったかしら」

「うん。買い物に来ました。クロワッサンが美味しいと聞いたので」

「あら、そうなの！ お勧めよ」

「うん……ひとつください」

クロワッサンを紙袋に入れてもらい、代金を支払う。

「気をつけて帰るんだよ。人出が増えて、スリなんかも居るから」

「うん、ありがとう。……あの」

「はあい？」

「ここ何年かで——駆け落ちした人のこと、知ってる？」

「駆け落ち？ 駆け落ち……」

しばらく考え込むように視線をめぐらせる。沈黙を貫いたのはおかみさんが手のひらを打ち合わせる音だった。

「ああ！ リンダのこの息子だわ」

「リンダさん？」

「そう、漁港のすぐそばの魚屋で働いてるんだけど。名前が、えーっと、なんだっけ。で、その子が色男だったんだけど、何年か前に駆け落ちして町を出たわね。……なんでそんなことを気にするの？」

「さつき、マリウスに話を聞いて。……あの、メイトフリークだったって聞いたから。僕も、自動人形好きだし、それで……もしまだ街に居るなら、話を聞きたいなって」

「ふーん。そういえば、そんな趣味も持ってたかしらね。そういえば！ 駆け落ちした相手がまたとっても若い子だったんだって、……っと、あたしったら」

口を手を当て自分を恥じる。



「そつか……ありがとう」

探して——どうしようというのだろう。

もしまだ街に居るとして。

マリンを迎えに行かせるのか？

一度捨てたような奴が、もう一度メイトを大切に扱うとは思えない。それに、メイトは代替の利く電化製品だ。捨てたからといって、それが不法投棄になるからといって、持ち主に引き取るように勧告する手間をかける理由も、義理も、何もないはずだ——。

考えても仕方が無い。それに何より、もう——

「もう、居ないんだね。リンダさんの息子さんは」

ならば一切、気がかりは晴れる。

明日の昼の列車でこの町ともお別れだ。マリンとも、二度と会うことはないだろう。忘れればいい——。

「あら。帰ってるわよ、半年くらい前に」

「……え？」

「えーつと、そうだわ、ジャン、ジャンって名前で。結局振られて、実家に戻ってきたのよ。今は何やってたかしら。

怪しげなものを売り歩いて、ふらふら、ふらふら……。今日もそのへんで商売してるんじゃないかしら」

「……どこに行けば会えますか？」

「そこまでは、分からないわねえ。あたしも最近見かけてなかったし……。リンダに聞いてみる？」

「いえ……ありがとうございました。僕、帰ります」

「もし見かけたら教えるわ」

「はい。それじゃあ。……行くよ、フラン」

「……はい」

この街に居る。ならばなぜ迎えに行かないのか。答えは明白で、今更問うまでもなかった。

帰途を辿り、薄闇に沈み行く空を見上げる。雨が降りそうだ。雨が降ってもあの少女は海を見つめて立ち尽くすのだろうか。

\*

帰りの道すがら、露店の店主を眺めて歩いた。マリンの主人を探すにしても、人相を知らないのに、無意味なことをしていると自覚していてもやめられない。

どの露店主も客に媚びた視線をあちこちに向けて商売相手を探している。店主の顔を見つめるアレックスと目が合うこともしばしばだ。

「……………」

若い店主と一瞬目が合う。彼はアレックスの姿を見て商売相手ではないと判断したのかすぐに顔をそらして他の客を探した。品揃えに惹かれた客が何か部品を手取る。過ぎ去る瞬間、客へ囁く男の声が聞こえた。

「本物だよ」

咄嗟に振り返って店を見た。不意に、その隣に寄り添う少女に目を奪われる。

「マリン」

そっくりだった。純真そうな大きな瞳も、素直そうな横顔も。何よりその全体の雰囲気似ている。

従順に主人に寄り添って、夜の帳が下りた商店街を眺める瞳が——ピカッ。一度、赤く輝く。

その輝きが、彼女が自動人形であることを証明する。

「あの」

考える前に話しかけていた。

店主の若い男が面倒そうにアレックスを見上げる。金にならないことに割く時間は無駄だと考えている態度だった。

「何か？」

「その——人形」

言いかけて、躊躇う。

自動人形のパーツには数限り有り、その組み合わせには限界が生じる。少し似ている程度の人形など、何の関連性もなくいくつも存在するのである。

「……マリン」

「はい、なんでしょうか、お客様」

アレックスの弦きを拾って、自動人形が小首をかしげた。店主の不審そうな視線を受けて、問いかける。

「マリンって、言うんですか」

「ああ、こいつ。そうだよ。どこかで聞いた？」

「いえ——いえ。……以前も、人形に同じ名を」

無精ひげを撫で、男が人形を顧みる。

「ああ、まあ、つけたよ。マリン。四代目だけど。新しいほど、やっぱり良いからね」

「あなたは……ジャンさん？」

「そうだけど？ ……誰？」

怪訝な眼差しがアレックスをようやくまともに捕らえた。

「……港に立つてるのはご存知ですか？」

「何？」

「あなたの人形が……まだ、あなたを待っているって」

「ああ……もう、いいよ。面倒くさいから」

悪びれもせず笑いもせず、平坦な声が答えた。

「——知っていたんですね」

「まあね、でも、べつにもう。新しいのものもあるし……そうだ、君にあれをそのままを売ってもいい。安くしておくよ」

「……」

いない。

喉が震えて声が出なかった。理解しているつもりで、まだ、納得が出来なかった。

「……待つてるよ、彼女……ずっと。あなたを……待ってたよ」

搾り出した声を、男の声は軽く受け流す。

「困るんだよね、撤去されると思ったのにさ。こうなっちゃうともう、今から取りに行くのもまずいしな。どうせそのうち壊れれば回収されるから、いいんだけど」

「——そう、ですか」

文句のひとつも言ってやろうと、開いた口からそれだけ答えるのがやっとだった。

拳を硬く握り締めて、震えそうな肩を必死に抑えた。

「行こう、フラン」

もう言葉を交わすことすら耐え切れなくてきびすを返す。

濃い雨の気配が鼻を突いた。港へ向かう途中、雨は静かに降り出した。

「誰もが大切にするものじゃないことくらい、分かっている」

折り畳み式の傘の下で、アレックスが呟く。少年へ傘を差しかけ、自分もその下へ入って歩くフランが瞳を主へ向けた。

「ただの、便利な……人の形をしている機械だ。機能だけで言えば、携帯端末のほうが便利で……それだけだ。

そこにどの程度の価値を見出すか、そんなの、人の勝手だ。分かっている……」

「……はい」

「取替えのきく、ただの道具だ」

「……はい」

「だけど僕には彼女の姿が——」

足を向ける先に、夜にぼんやりと光をとすマリウスの店がある。

そしてその向こうに、夜に飲まれた細い人影がひとつ。

「……寂しく見えるよ」

「……はい」

遮るものは何もなく、細い雨に打たれている。

元は上等だったはずのドレスが重く水を吸い、彼女の体にまとわりついている。

「マリン」

「こんばんは、アレックス。今日は生憎のお天気ね」

「うん……。きみも、傘を差して」

「いいえ、ありがとう。だけれどあたしは、ご主人様と別れた時、傘を差していなかったから。

あたしを見つけてもらうためには、あの日のまま立っていなくっちゃ」

「……そう。……そうだよね」

「ごめんなさい。ありがとう、アレックス。あなたは優しいのね」

「僕は優しくなんかないよ」

「そう」

雨の勢いはごく静かに、地へ浸み込むように降り続けた。優しく傘を叩く音だけが響く。

マリンの隣に並んで立って、ただ海を眺めていた。

船のわずかな明かりに照らされた水面が、数え切れない小さな波紋を浮かべている。

同じ模様がずっと遠くまで、途切れなく続く。

「……また、明日。……明日、この町を発つけれど」

「そうなのね、アレックス。寂しくなるわ」

「うん……。それじゃあね」

「ええ。おやすみなさい、アレックス。お話してくれてありがとう」  
冷たい海へ背を向ける。暗闇から温かな明かりへ歩いていく。

4.

それは融通の利かない機械故の献身か、  
それとも。

今朝もマリンは港に立っていた。

小ぶりの雨が上がって、しかしまだ湿った空気が漂う重たい空の下、コートの裾を翻し、少年が歩み寄る。

大きな風が吹き込んで、しかし雨水を含んだ少女の服も髪も、細い体に張り付いていた。

吹き止まぬ風に翻弄されながら、少女の二本の足は決して揺るがない。

「……マリン。さようなら。僕は、もう行くから。……きみのご主人様を見つけてあげられなくて、ごめんね」

「アレックス。……寂しくなるわね。でも、お話してくれてありがとう。嬉しかったわ。」

どうか、旅の先でご主人様を見かけたら、どうか教えてあげてね。あたしは今も、ここでこうして待っているから。あたしはずっと、待っているから、って——」

「……うん。約束するよ」

少年は嘘をついた舌でまた嘘を重ねる。

重たく垂れ込めた雲の先を見つめて、不意に強く吹き込んだ風に硬く目を閉じた。

「——ご主人様。時間が迫っています」

瞼で閉ざした視界に聞こえる声に、顔を上げる。

自分とよく似た顔をした少女が、そこへ何の感情も表さずに、じつとこちらを見つめていた。

「行くよ、フラン。……それじゃあ、さよなら」

「ええ、さよなら、アレックス」

唇を閉ざして、つま先の方を変え。駅へ向かう道、露店で再び彼の姿を見た。マリンと同じ顔をした少女の形も、昨日と同じく傍らに寄り添っている。

「……かわいそうだと思わない？」

不意の問いかけに、男は一瞬困惑して、それから思い当たったように双眸を眇めた。

「そう思わないから、こいつらが好きなんだ」

男は笑うように唇を歪めた。しかしその表情は決して笑顔にはなりえなかった。

「そうだろ？」

男の問いかけに、舌がもう一度、嘘を重ねた。

「そうだね」

一度も振り返らずに駅へ向かう。乗り込んだ車両の中、まだ潮の匂いが体にこびりついている。辛い香りが鼻をつくたび、彼女の後姿が鮮明に目の前に浮かび上がる。

果てのない海へ向かう背中。立ち尽くして独り、主の帰りを待っている。

「かわいそうだと、思わないか……？」

解放してやるべきだったのか、無理にでも再会させるべきだったのか。

何の干渉もせずに町を出たことを、いつか後悔するだろうか。

煩悶する端から漏れた独り言に、血の通わぬ相棒が答えた。

「いいえ、ご主人様。自動人形はご主人様に必要とされることが存在意義となります。

命令を下されて、それを実施しているマリンは、有意義です」

「……そうか。それなら、彼女は——」

眩きが列車の走行音にかき消される。潮の匂いが次第に遠ざかっていく。





## Little Curly Digital Book 01

「冷たい手のひら（1）約束は錆」（2012.09.10）

Text: 来渡森子（<http://lucray.cocotte.jp/>）

Illustration: ミチトウ（<http://wica.main.jp/>）

ご購入ありがとうございます。

ご感想・ご指摘などお待ちしております。

※本書のデータは個人使用の範囲内で楽しみ下さい。

無断転載、再アップロード、再配布等は禁止致します。